

「テロ」と「ジハード」のレトリック

'TERÖR'ÜN VE 'CİHAD'IN RETORİĞİ

ジャーネル・タスラマン

CANER TASLAMAN

İstanbul Yayınevi

第 8 版発行：İstanbul Yayınevi, 2014 年

書名：「テロ」と「ジハード」のレトリック

著者：ジャネル・タスラマン

www.canertaslaman.com

facebook.com/canertaslaman

YouTube: Caner Taslaman Videoları

Twitter.com/ctaslaman

カバーデザイン：ユヌス・カラアルスラン

レイアウト：アーデム・シェネル

ISBN：978-8727-03-2

印刷およびカバー：Pasifik Ofset Ltd. Şti.

住所：Cihangir Mah. Güvercin Cad.

No: 3/1 Baha İş Merkezi A Blok Kat: 2 34310 Haramidere/İSTANBUL

Tel: 0212 412 17 77 Certificate No:12027

出版社：İstanbul Yayınevi

住所：Çağaloğlu Yokuşu Evren Han No:17 Kat:1 Daire:33

ŞİRKECİ – İSTANBUL

Tel: (0212) 519 62 72 Fax: (0212) 513 73 86

www.istanbulyayinevi.net

bilgi@istanbulyayinevi.net

facebook.com/istanbulyayinevi

twitter.com/istanbulyayinevi

「テロ」と「ジハード」のレトリック

哲学的・神学的考察*

ジャネル・タスラマン

*本書は、日本中東学会年報が2007年2月に刊行したジャネル・タスラマン著・英語論文「『テロ』と『ジハード』：哲学的・神学的考察」を、著者がトルコ語に訳したもの（の和訳）である。

フェリヤルへ

ジャーネル・タスラマン(Caner Taslaman)：ボアジチ大学文理学部社会学科卒業。マルマラ大学大学院神学部哲学・宗教科学科でビッグバン理論の哲学・宗教との繋がりに関する論文により修士号、進化論の哲学・宗教との繋がりに関する論文により博士号を取得。その後、科学・哲学・宗教の三大テーマに関する研究により准教授・教授となる。また、「グローバル化におけるトルコのイスラム」の研究により、二度目の博士号をイスタンブール大学大学院政治科学部で取得。まず東京大学、続いてオックスフォード大学で博士研究員を務める。ハーバード大学とケンブリッジ大学で客員研究員を務める。

目次

序文.....	7
レトリックとしての「テロ」の概念	10
レトリックとしての「ジハード」の概念.....	15
クルアーンにおける「ジハード」の意味.....	18
クルアーンと戦争倫理	22
クルアーンから見た和議締結とコミュニケーション	27
「要因」となることと「人を動かすための要素」となることの違い	30
例外的な緊急事態.....	34
参考文献.....	37

序文

2001年9月11日、世界貿易センター（WTC）のツインタワーが崩壊するさまを、全世界が生中継で見守った。「テロ」そして「ジハード」という言葉が世界中で頻繁に用いられるようになったのは、この時からである。本書では、この二つが指す特定の事件ではなく、その言葉自体を取り上げた。利益のために人々を動かそうとする者は、言葉の使い方を操って目的を達成しようとする。この二つの言葉のレトリックが生まれる理由もそうした行為と関係していることを、本書で説き明かそうと努めた。

本書では、「レトリック」という単語は、利益、特に政治的な目標のために人々を説得する手段としての言葉の使い方を意味する。イデオロギーや思想を強固にしようとする、またはその支持者を集めようとする者は、人々を説得しなければならない。メディアが盛んなプロパガンダを通じてそうすることもあれば、政治や宗教の権威がそのカリスマ性や人々に対するヘゲモニーを利用することもある。こうした状況ではいつも、「レトリック」が説得のための重要な要素となってくる。しかし、何が「正しい」のか、を重視するのであれば、「テロ」「ジハード」といった概念を、レトリックに囚われることなく哲学的に検討しなければならない。そのうち「ジハード」は神学上の概念であるため、これを神学的に考察することも必要である。レトリックの雨が降り注ぎ、言葉巧みに「正当性」が作り上げられる中でレトリックに囚われないようにするためには、哲学的・神学的な検証が欠かせない。本書を執筆したのも、それに応えるためである。

本書では「テロ」の概念を取り上げつつも、「ジハード」の概念についてより多く検討している。クルアーンで「ジハード」の概念がどう使われているか、そして一部の宗派が「ジハード」をクルアーンの精神に反する形で解釈していることを明らかにしようとする。クルアーンの視点から見た「戦争倫理」を扱った。また、こうしたテーマを著名な哲学者のカント、ロールズ、ハーバーマスなどの思想に触れて検討しつつ、哲学的考察と神学的考察を一冊の本の中でまとめようと試みた。

本書では、哲学が、（広く誤解されているように）抽象的なテーマだけに関するものではないこと、現代世界で人々に影響を与えている最大の問題にかかわるものとして哲学を吟味することがどれほど重要であるかということも、例を挙げて示そうと努めた。世界を平和に導くためには、政治的利益に操られるレトリックを封じるべきであり、哲学がその大きな役割を背負っていると、私は信じている。私は本書の大部分を、東京大学で客員研究員を務めた時期に執筆した。東京大学、そして同大学で私の研究に寄与して下さった竹下政孝氏とハールーン・アナイ氏に感謝の意を表し、また本書を手にとって下さった読者の方々にもお礼

を申し上げたい。みなさんの批評やコメントを <http://www.canertaslaman.com/>までお待ちしている。

本書の目的は、「テロ」と「ジハード」の概念がレトリックとして使われるために生じる問題を明らかにし、それが文明と文明の間のコミュニケーションをどう妨げてきたかを明らかにすることにある。

冷戦の終焉と同時に、グローバル化の前に立ちほだかる障害は全部取り除かれたという楽観的な空気が広がった。しかし、「バンドラの箱」が、2001年9月11日に開いてしまったのである。グローバル化する世界のレヴィアタン¹とみなされていたアメリカの心臓部のツインタワーといっしょに、楽観的な空気も消え去ってしまった。この事件の後、1991年に勃発した湾岸戦争を理由に当初から楽観的な空気を疑ってかかり、「文明の衝突」を主張していた人々の意見が、より一層注目されるようになった。この出来事が生んだ数々の議論は、宗教哲学、政治哲学、言語哲学、美学、解釈学、国際関係、神学にいたるまで、様々な分野にかかわっている。

9・11についてのデリダのコメントを引用しつつ、本書に着手したい。「哲学者は、『理解すること』と『正当化すること』を区別するための新たな基準を探し求める人物でなければならない。人は、戦争やテロを引き起こす一連の事件や事象を、それを微塵も正当化することなく、しかもそれを忌み嫌いながら、または新たな事象を生み出そうと試みながらも、描写し、説明し、理解することができる。人は、テロ行為を（国家テロであってもなくても）引き起こす、さらにはそれを正当化する状況を、無視することなく、無条件に忌み嫌うことができる²」

¹レヴィアタン（リヴァイアサン）は、旧約聖書に登場する海の怪物。政治学と哲学では、トマス・ホッブズの著書名として有名である。この著書の中でホッブズは、支配者が絶対的権力を持つことよりも、社会に混乱が広まることの方がより悪い状態であると伝えつつ、支配者の絶対的権力を正当化している。

² Jacques Derrida, *Autoimmunity: Real and Symbolic Suicides, A Dialogue with Jacques Derrida*, Giovanna Borradori'nin röportajı, *Philosophy in a Time of Terror içinde*, translator: Pascale-Anne Brault and Michael Nass, Supervisor: Jacques Derrida, (The University of Chicago Press, 2003), p. 106-107

レトリックとしての「テロ」の概念

ある研究では、「テロ」には 109 種類の定義があることが確認されている³。今日頻繁に耳にするのは、「テロの真の意味は・・・」「本物のテロリストとは・・・をする者のことである」「彼らは我々をテロリストと呼ぶが・・・」といった言い方である。こうした定義はどれも、「テロ」を、プラトンの「アイデア」であるかのように、またその「本当の意味⁴」を立証するものもまるでその「アイデア」であるかのように取り上げている。ヴィトゲンシュタインが伝えるように、言葉というものが本来、社会が共有し、社会の中で学び取られる「ツール」の集まりであること、そしてわれわれ全員が、大きな言葉のゲームの一員であることを忘れてはならない⁵。言葉の社会的構造を理解してから、テロの定義の仕方をこう修正することができる。「人々は、テロという言葉により、概ね・・・を意図している」「FBI の定義によれば、テロリストとは・・・」「ヒズボラの定義によれば、テロリストとは・・・」と。こうした言い方により、テロの定義が純粋なものではないこと、先に述べた定義が特定の利益やイデオロギーと絡んだものであることがわかる。フーコーが言うように、「われわれは、正当性というものがパワーを介して作り出されるさまを目の当たりにしている⁶」のである。パワーを行使する方法の一つは、言葉の使い方を方向づけることである。

「テロ」の概念が初めて登場したのは、1789 年のフランス革命のときである⁷。われわれが日常的に使うのとは違い、ジャコバン派が使う「テロ」の概念には、ポジティブな意味があった。それは、ジャコバン派が、自分たちが行う「テロ」という暴力行為を、平和に満ちた環境を作るために必要なものと考えていたからだ。現在は「テロ」には、誰もがよく知っているように、ネガティブな意味がある。そのため、誰もが自分のライバルを「テロリスト」と決めてかかる。一人物が、人によって「自由の戦士」とも、「テロリスト」ともなるのはそのためである。

³ Nezh Tavlaz, Terörü Tanımlamak, (Strateji Dergisi, Sayı 2, 1995), p. 125

⁴ 多くの人々が無意識にテロの意味をこのように使っているが、プラトンの説く世界にテロを意味する「アイデア」（真の姿）があると説明できる人物がいるとは、私は思わない。

⁵ Ludwig Wittgenstein, Philosophical Investigations, (Blackwell Publishing, 2001). この著書は、ヴィトゲンシュタインの第二期の哲学を明らかにしている。

⁶ Michel Foucault, Power, Right, Truth, ed. Robert E. Goodin and Philip Pettit, Contemporary Political Philosophy, (Blackwell Publishers, 2002), p. 543

⁷ Bruce Hoffman, Inside Terrorism, (Columbia University Press, 1998), p. 15

例えば、多くの人がテロ組織とみなしているヒズボラの創設者ファドラーは、次のように語っている。

「我々に、テロリストであるという自覚はない。我々はテロリズムを信じていないからだ。我々の土地を占領する者と戦うことは、テロではない。我々は自らを、聖なる戦いを行う戦士だと自覚している⁸」

ファドラーは、ヒズボラの活動を「自由のための戦い」と呼び、正当化している。

一方、FBIのテロの定義は、「政治的または社会的な特定の目的に向けて、政府、一般人の全部または一部を恐怖におとしいれるか、圧力をかけるため、人または財産に対し武力や暴力を違法に行行使すること」となっている⁹。FBIの定義が「無実の人々」ではなく「一般人」という単語を使い、また政府（国家）に対する行為に触れているのは、FBIの立場と関係がある。テロの概念が初めて使われたのは、フランス革命のときで、その目的は国家が行うテロについて説明することだった。その一方で、19世紀末と20世紀初頭のハーグ条約や1949年のジュネーブ条約などの国際条約は、国家も犯罪を含む行為に関与する可能性があることを示唆している。なので、テロとは、この言葉を使う者のアイデンティティではなく、その使い方とその犠牲者の性質から生まれる倫理上の問題なのである¹⁰。一般人への攻撃は、道徳上の悪行とみなされる。攻撃者は強力な武器や大砲で身を固めているが、一般人は弱々しい素手でしかそれに反撃できないからだ。しかしまた、高度な技術を備えた軍隊を相手に戦う兵士や戦士の多くも、軍隊の前に立つ一般人とそう変わりはない。彼らも、最新鋭の爆撃機に対しては同じように無力で救いのない状態にあるからだ。ハーバーマスは、この不釣り合いな状況から生まれる倫理的問題に、次のように着目している。

「電子的制御下であり、綿密に設計され、多目的に使用されるミサイルの空中における破壊力と、地上でカラシニコフ銃を手にし、ひげを生やした原始的な戦士の集団という不釣り合いな光景には、倫理的に嫌悪を抱かざるを得ない¹¹」

⁸ Bruce Hoffman, *ibid.*, p.31

⁹ Terrorism Definitions, www.fbi.gov/publications/terror/terror2000_2001.html, Code of Federal Regulations 第 28 条, 0.85 項, (20 April, 2006)

¹⁰ Tomis Kapitan, "Terrorism" as a Method of Terrorism, ed: G. Meggle, *Ethics of Terrorism and Counter Terrorism* in içinde, (Ontos-Heusenstamm, 2004), p. 23

¹¹ Jurgen Habermas, *Fundamentalism and Terror, A Dialogue with Jurgen Hobermars, Giovanna Borradori* のルポルタージュ, (Philosophy in a Time of Terror), 翻訳: Luis Guzman, 校正: Jurgen Habermas, (The University of Chicago Press, 2003), p.28

「テロ」の概念をレトリックとして使った最も興味深い例として、アメリカのアフガン人戦士の捉え方がある。アメリカはアフガン人戦士を「聖なる戦士」と呼び、ソ連の侵攻と戦う彼らを支援した¹²。

タリバンがアメリカを攻撃し始めると、「聖なる戦士」は「テロリスト」に変貌し、「テロとの戦い」の最初の標的となった。

暴力を行使するどの当事者の間でも対話は難しくなるばかりで、一般人や無実の人の死は、その国民または犠牲者の民族の復讐の念をあおり、復讐の連鎖が次々に暴力を呼んでいる。自爆攻撃犯を対象にしたある研究では、攻撃犯の多くが、戦いで友人または愛する人を失った人物であることがわかっている¹³。この研究は、あらゆる暴力行為の結果として（こうした行為の連鎖が復讐の念を起こすため）、世界の平和がさらに危うくなることを如実に示している。

デリダは、世界のどの「テロリスト」も、自分はまず国家が犯した「テロリズム」に対し、（正当性[正当性は信じやすかろうと、信じにくかろうと関係ない]をかさに着た、「テロリズム」とは違う名前を持つテロリズムに対し）自己防衛として反撃するのだと主張していると言う¹⁴。暴力を正当化するための「言葉の使い方」の背後にある動機は、「彼ら」が「我々」に味方するか、しないかにかかっているのだ¹⁵。

コーディが「テロリズムの倫理」という論文で引用した次の詩は、「テロ」の概念のレトリック化に皮肉な問いを投げかけている。

爆弾を投げつけることは悪く

爆撃することは良い

つまるところ、テロの意味は

統治者の冠を誰がかぶっているか次第なのだ¹⁶

¹² Mehmet Ali Civelek, *Küreselleşme ve Terör, Saldırganlık Gerçeği*, (Ütopya Press, 2001), p. 288

¹³ Deniz Ülke Arıboğan, *Tarihin Sonundan Barışın Sonuna*, (Timaş Press, 2003), p.78

¹⁴ Jacques Derrida, *ibid.*, p.103

¹⁵ C.A.J. Coady, *The Morality of Terrorism*, (Philosophy 60, 1985), p. 63-64

¹⁶ C.A.J. Coady, *ibid.*, p.47

コーディは、暴力を正当化するための「言葉の使い方」の背後にある動機は、「彼ら」が「我々」に味方するかしないかにかかっていると説く¹⁷。アメリカの哲学者トミス・カピタンは、テロをレトリックとして使うことで生じる弊害を次のようにうまく言い表している。

「レトリックは、有意義な政治的議論を黙らせるのに使われる。通常の条件のもとでは『なぜ?』と問いかける者が、テロを寛容に捉える者と思われることを恐れる。レトリックを駆使する者は、批判的な考え方と譲歩的な考え方の違いを意識的に捻じ曲げるためにレトリックを使う。レトリックに屈した者は、自国の政府が、テロ活動に関与した者だけでなく、テロリストの出身民族（テロリストの多くも一般人であり、他の一般人とあまり交流することなく共存しているために）に対しても企てる暴力行為を支持し、復讐の連鎖に手を貸してしまう。その結果、一般人を標的にした政治的な動機を持つ暴力が、『復讐』または『対テロ』という別の名前のテロリズムのもとで拡大するのだ。テロに関するレトリックにあるのは、パワーの言葉だけである。自分を許しがたい不正の犠牲者とみなした人物、自分に対し圧力をかけてくる者が、許容できる範囲で譲歩しても和解する意思を持たないと判断した人物は、暴力に対しさらなる暴力で応えようとする¹⁸」

「テロ」の概念をレトリックとして使う者にとって生まれる弊害は、それぞれ異なる、さらには敵同士のグループでさえ、暴力行為をめぐって手を組み、同盟しやすくなるということである。

例えば、アルカイダは「ジハード」その他のイスラムの概念を、アメリカと同様シーア派に対してもレトリックとして使い、アフガニスタンでシーア派を虐殺した。シーア派とアルカイダを「イスラムのテロリスト」などの名前で同一視し、「テロとの戦い」もその両者に対抗する別の陣営として位置づけてしまえば、そして大量破壊兵器を持つと考えられるイランがアルカイダとその兵器を共有する決定を下してしまえば、こうしたグループを同一の名前で呼ぶ者に新たな災厄が降りかかりはしないだろうか？一方、ムスリム人口を多く抱える諸国家が意見を一致させた政治的テーマというのはめったにない。そうしたテーマの一つに、パレスチナ問題においてパレスチナの人々が不当な扱いを受けているという考え方がある。イスラエルと対立するパレスチナ人グループを「テロリスト」と呼んでアルカイダと同一視すれば、世界の一端でパレスチナ人に対しさらに激しい反発が起きるだろうが、それと同時にアルカイダは世界各地で支持者を集めやすくなるのだ。

¹⁷ C.A.J. Coady, *ibid.*, p.63-64

¹⁸ Tomis Kapitan, *ibid.*, p.28, こちらも参照; Tomis Kapitan, *The Rhetoric of Terrorism and Its Consequences*, (*Journal of Political and Military Sociology*, Summer 2002)

ある行為を「テロとの戦い」または「ジハード」と呼び、その正当性を有無を言わず認めさせることは、非道徳的である。こうしたレトリックを使って暴力に訴える者は、自分のすることには議論の余地はないと主張する。しかし、特定の名前をつけ、また自分の利益に有利なように言葉の概念を定めても、その行為が正しいか不当かという議論を葬り去ることはできない。一つ一つの「行為」を、他の行為と区別し分析した視点から検討することが必要である。すべての行為を一つの名前で一つのカテゴリーに押し込めてしまうことは、そうした行為の理由や目標がそれぞれ違っているために適切ではない。また、こうした方法が人々を動かすのに役に立つと考える者は、気づかぬうちに自分の敵を増やしかねないということを覚えておかなければならない。

レトリックとしての「ジハード」の概念

「テロ」と同じように、イスラムの多くの概念、特に「ジハード」も、レトリックとして使われている。しかし、ムスリムにとって、クルアーンの概念の存在論的あり方と、人間が作り出した概念のそれには、大きな違いがある。「テロ」の概念の意味は、社会学的研究によってのみ明らかにすることができる。社会学的・歴史学的研究を行い、政治と社会の関係を見極めることは、イスラムに関する言葉の使い方を理解するためにも必要である。しかし、イスラムに関する概念が使われているのは、「テロ」とは違い、その概念の「本当の意味」を学ぶことができるテキスト（クルアーン）である。クルアーンを相応に解釈し捉えることで、こうした概念を解明する試みが可能になる。イスラムにとってクルアーンは、神が人間との関係を築くテキストであり、預言者ムハンマドの主な使命も、そのメッセージを人々に伝えることだった。神が記したテキストであるクルアーンは人間を超越しているが、言葉、文字、文章でできているので人間のためのものである。クルアーンの「人間を超越した」構成は、イスラムに関する用語の「本当の意味」の拠り所である。クルアーンは人間のためのものなので、そうした「本当の意味」を理解するためには相応なアプローチをしなければならない。ただし、そのための研究をするときは、人間による解釈が神の啓示であるかのように保証されるわけではないということを、念頭に置く必要がある。

個人の利益、誤った理解、古い伝統の影響、そして政治的目的は、クルアーンが誤って解釈され、その意味が歪曲される原因となり、ハディースやファトワー（宗教的見解・判断の意味）などの宗教的書物がクルアーン以上に重視されるという事態を招いているが、それでも、クルアーンは今も「本当の意味」を伝える書物として存在している。現代イスラムの思想家たちは、個人レベルでは大きな違いがあるとはいえ、その大部分に共通しているのは、ハディースをクルアーン以上に重視することを批判している点である。サイド・アフマド・ハーン、ムハンマド・アブドゥフ、ラシード・リダー、メフメト・アキフ、アフメト・エミン、タウフィーク・スドゥク、マフムード・アブー・ライーヤ、ムハンマド・アル・ガザーリー、ファズルラフマンは、そうした思想家のほんの一部である¹⁹。現代のこうした批判は、もともと、預言者ムハンマドの死から数世紀が経つまで頻繁に行われていたことが、イスラムの文献からわかっている。ここで、この思想家たちが主に批判しているのは、預言者ムハンマドの言葉がクルアーン以上に、またはクルアーンに代わって重視されていることではない点に注意しなければならない。イスラムによれば、預言者はクルアーンに反することを語らないからである。批判しているのは、預言者の死から3世紀後に編纂された最も有

¹⁹ M. Hayri Kirbaşoğlu, *İslam Düşüncesinde Hadis Metodolojisi*, (Ankara Okulu Press, 1999), p. 14-15

名なハディース書にすら、人々が誤って、意図的に、また政治的目的のために多くの風聞を取り込んだことである（われわれにとって、ハディースが風聞であることの最大の証拠は、ハディースがクルアーンと矛盾していることである）。

こうした問題の唯一の解決方法は、相応な解釈学的アプローチにより、特に政治的理由から編み出されたクルアーンの解説、ファトワー、風聞のハディースを取り除き、ジハード、戦争、信仰の自由などに対するイスラムの姿勢をはっきりさせることである。

ハサン・サッバーフとその暗殺教団（12-13世紀）は、政治的利益のために宗教的な言葉をレトリック化した者たちとして有名である²⁰。宗教的概念のレトリック化は、つい最近にも多く見られた。1991年の湾岸戦争の際に、サダム・フセインに対抗してアメリカ率いる連合軍に加わったイスラム諸国の首脳たちは、自分の行為を正当化するために宗教指導者からファトワー（判断、見解の意味）を授かった²¹。一方、オサマ・ビンラディンは、イスラムの指導者たちのファトワーにより行われたはずの湾岸戦争を、アメリカと戦う（ジハード）理由にした²²。こうした出来事は、「ジハード」や他のイスラムの概念がレトリックとして使われた無数の例のほんの一部である。実際には、中東でイスラムにより正当化されていない戦争を起こすことは、とても難しい。

その理由は、イスラムの啓示から現在までずっと、イスラムがこの地域の文化の最大の要素だったことである。戦争となると、最も世俗的な者でさえ、民衆の支持を得るために、宗教的概念をレトリックとして使った。デイヴィッド・ラパポートは、サダム・フセインが根っからの保守的な宗教者と対立する世俗的リーダーでありながら、イラク国民を動かすために「ジハード」という言葉をどう使ったかを、次のように説明している。

「サウジアラビアの聖地を悪魔と占領から救い出し、異教徒（欧米人）をこの地から追い出すためにジハードを呼びかけた。フセインがメッカのモスクに口づけをしたときの上着のない姿を捉えたカラー写真と、イスラムの最も神聖なモスクで軍服を着て礼拝する様子を捉えたもう1枚の写真が示されつつフセインの演説が流れたとき、フセインを支持する背景は変わりつつあった。

湾岸危機が始まった1990年8月から、フセインの言葉は宗教色を帯びていった。これは非常に皮肉なことである。キリスト教徒が設立したフセインの政党は、イラクを世俗国家に

²⁰ Abdülkerim Özaydın, 'Hasan Sabbah' maddesi, Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, 16th (Türkiye Diyanet Vakfı, 1997) p. 348-350

²¹ John L. Esposito, *Unholy War*, (Oxford University Press, 2002), p. 34

²² Michael S. Swetham, Yonah Alexander, *Bir Terörist Ağının Profili: Usame Bin Laden*, (Güncel Yayıncılık, 2001), p. 129-130

するために尽力した。その一方で、フセインがこの演説をしたときは、イスラム保守層に対する大きな代償つきの闘争が終わってまもないころだったのだ²³」

²³ David C. Rapoport, Some General Observations on Religion and Violence, (Journal of Terrorism and Political Violence, no:3, 1991), p. 122

クルアーンにおける「ジハード」の意味

クルアーンでは、「ジハード」の概念は「努力する」「奮闘する」という意味で使われ、心理的、知的、社会的な面を持っている。

アッラーの名において行う戦いも「ジハード」と呼ばれる。その戦いが、敵に対して奮闘するという意味だからである²⁴。ジハードという言葉がこの意味で使うクルアーンの文言は次のとおり。

悔悟章 41 節：軽装備、重装備で戦いに赴きなさい。そしてあなた方の財産と生命をかけて、アッラーの道のために奮闘努力しなさい。あなた方が理解するならば、そうすることがあなた方にとってより善いのである。

クルアーンに登場する「戦」という言葉も戦いを意味するが、このテーマを扱った論文や本では「ジハード」という言葉の方の方により重点が置かれており、イスラムのもとに行う戦いは概ねこの「ジハード」という名前で研究されている。ただし、イスラムにおける「戦い」／「ジハード」について研究する者は、この二つの言葉が登場するクルアーンのすべての文言を考慮しなければならない。

ムスリムはアッラーの名のもとに行われる戦いだけに加わることができ、自分の利益のために戦ってはならないということは、実際には人々のそれぞれの行動に違った形で反映されているとはいえ、人々の意見が一致している点だと言える。しかし、最大の違いは、「ジハード」がムスリムの自己防衛のための戦いなのか、他の宗教の信者に対する（その宗教の信者であるという理由だけの）戦いなのかということである。

クルアーン全体を俯瞰すると、戦争に関するクルアーンの文言が、ムスリムに対し戦いをしかけてくる者を対象としていることがすぐにわかる。それに関する二つの文言は次のとおり。

雌牛章 193 節：騒乱がなくなるまで彼らと戦いなさい。もし彼らが戦いを止めるなら、不正を行う者以外には敵意を持たないように。

巡礼章 39 節：戦いをしかけられた人々は、戦いをしかけた者と戦うことが許された。確かにアッラーには、彼らを助ける力が十分にある。

²⁴ Bekir Karliğa, Cihad ve Terör, (Karizma, Mart, 2002), p. 118-119

見てのとおり、クルアーンでは攻撃してきた者に対してのみ、戦うことが許されている。ハナフィー学派、そして一部のハンバル学派とマーリク学派の神学者の意見も同じである。しかし、シャーフイー学派や他のハンバル学派、マーリク学派の神学者は、イスラム以外の宗教の信者であることだけでも、相手と戦う理由として十分であるとみなしている²⁵。シャーフイー学派の宗教指導者は、クルアーンの次の文言によりその考え方を立証しようとする。

悔悟章 5 節：禁忌の 4 か月が過ぎたなら、どこであれ、アッラーに同位を配する者を見つけ次第殺し、彼らを捕え、包囲し、あらゆる退路を断ちなさい。

しかし、この文言が登場する悔悟章の全体を俯瞰すると、その相手というのが、ムスリムと戦い、ムスリムとの盟約の条件に従わない者であることがすぐにわかる。悔悟章の 1 節を読むだけでも、この章で許される戦いの相手が、ムスリム以外のすべての者ではなく、預言者ムハンマドとその友人に戦いをしかけてきた特定の集団だということがわかる。

悔悟章 1 節：これは、アッラーに同位を配する者のうちあなた方が盟約を結んだ者に対する、アッラーと預言者ムハンマドからの確実な警告である。

ここで警告を受けている者が、最初に戦いをしかけてきた者であることが、悔悟章のその後の文言からはっきりとわかる。

悔悟章 12 節：盟約の後に、その誓いを破り、あなた方の信仰を罵るのであれば、非信者の指導者たちと戦いなさい。彼らは誓いを持たない者であるが、彼らは罵りを止めるかもしれない。

悔悟章 13 節：誓いを破り、使徒（ムハンマド）を追放しようとして、最初にあなた方に攻撃をしかけてきた者と戦わないのか？彼らを恐れているのか？もし信仰があるのなら、アッラーをこそ、最も恐れるべきである。

シャーフイー学派の神学者たちが、先に述べた文言（悔悟章 5 節）をこの章全体から切り離さずにいたら、相手が「異教徒」であることが戦いの理由にはならないと、すぐにわかったはずである²⁶。クルアーンを相応な解釈学的アプローチで捉えるための最も大事な原則は、クルアーン全体を俯瞰し、その文言を前後の文言と合わせて検討することである。シャーフイー学派は、ムスリムが攻撃を受けたときにだけ戦うという条件を示すクルアーンの

²⁵ Ahmet Özel, 'Cihad' maddesi, Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 7, (Türkiye Diyanet Vakfı Press, 1993), p. 528-529

²⁶ Hasan Elik, Dini Özünden Okumak, (Marmara Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Press, 2004), p. 165-182

文言の効力は失われていると言ひ、一部のハディースを利用して自らの考えを裏付けようとする。

アフメト・オゼルは、クルアーンでジハードに関する文言同士が互いの効力を奪うという説には科学的な側面が一切ないと言ふ²⁷。クルアーンの一部が他の部分の効力を奪うという説と、風聞のハディースが宗教的なルールを定める際に果たす役割は何であるかという問いは、イスラムに関して今日最もよく議論されている問題である。どの文言が否定されているか、あるいはされていないかという決まりが存在しないため、この主張を擁護する人々は、それを決定づける権利を自分の宗派の宗教指導者に委ねる。

ムハンマド・エセトは、この説にはクルアーンに基づく論拠がなく、しかもそれを裏付けるための信頼に足るハディースは一つもないと言ふ²⁸。この点で思い出すべきだが、姦淫した女性に対する石打ちの刑についても（クルアーンと完全に矛盾していながら）、この説をもとにして立証しようとする動きがある。もしクルアーンを相応な解釈学的アプローチで捉えれば、そしてクルアーンの文言が首尾一貫しているという基本原則を認めるとすれば（われわれはそうあるべきと考えている）、クルアーンの一部が他の部分を否定すると言ひながら、否定されたのがどの文言であるかという、誰もが認めるような基準を示すことができない人々の説は、賛同に値しない。クルアーンの一部の文言が他の文言を否定するには、クルアーンの文言同士が矛盾していなければならないのだ。この考え方は、クルアーンに矛盾はないという次の文言にそぐわない。

女性章 82 節：彼らはクルアーンについてよく考えないのだろうか？もしクルアーンがアッラー以外のものから下されていたとすれば、彼らはその中に多くの矛盾を見い出していたはずである。

また、先にも述べたように「信頼に足る」ハディース書にすら、捏造のハディースが多く記されている。この問題は、こうした研究について議論する上で特に重要である。自分の意見に反するクルアーンの文言は「否定されている」と言ひ、クルアーンよりも、様々な政治目的によって捏造されたものも含むハディース書から自分の考えを裏付けるハディースを選ぶ一部の神学権威者は、実質的にクルアーンに反する行動を取っていることになる。こうした神学者たちの意見を検証するには、その生きた時代の政治的背景を考慮しなければならない。初期イスラムの時代の政治家たちは、部族間の衝突により敵同士になったグループを外部の敵と戦わせ、新たな征服活動をするために、その人々の能力を利用しようとした。結論として、「ジハード」のレトリックが生まれたのは、政治問題の拡大と密接に関わっている

²⁷ Ahmet Özel, *ibid.*, p. 529

²⁸ Muhammed Esed, *Kuran Mesaji*, translator: Cahit Koytak, Ahmet Ertürk, (İşaret Press, 1996), p. 30-31

とすることができる。このレトリックは、ムスリムに対して使われただけではない。様々な場面でムスリム同士がお互いを「異教徒」と呼び、自分の集団を敵と戦わせるために「ジハード」をレトリックとして利用している。クルアーンの一部の文言が別の文言を否定するという説、そしてハディースは、「ジハード」に、クルアーンにおける本当の意味ではなく「異教徒との戦い」という意味を持たせるのに大きな役割を果たした。これは、実質的に「常に戦っている状態にいななければならない」という意味になる。

ハディース、ファトワー、そしてクルアーンの一部の文言が別の文言を否定するという説によって生じる他の問題は、信仰の自由に関するものである。イスラムから他の宗教に改宗した人々や礼拝を拒否する人々を殺すこと、断食などの宗教行為を実践しない人々をこん棒で殴ることなどは、そのほんの一部である。しかし、クルアーンには信仰の自由を説く文言がある。

雌牛章 256 節：この宗教（イスラム）に、強制はない。

覆いかぶさるもの章 21-22 節：あなた（ムハンマド）は教訓を与え、思い起こさせなさい。

あなたは一人の論説者にすぎないのだ。彼らを強制し、圧迫する者ではなく。

イスラムにおいて相手が他の宗教の信者であることは相手と戦う理由にはならず、強制もないということがはっきりすれば、文明間のコミュニケーションも発展する。この一つ目の理由ははっきりしている。他の宗教の信者と戦うべきであれば、常に戦争状態にいななければならない、コミュニケーションなど取れなくなってしまうからである。二つ目は、一つ目に比べて間接的である。一見すれば、この理由はイスラム社会内の問題と捉えられる。しかし、人々をアッラーの道に招くことは宗教的な義務であるということを忘れてはならない²⁹。ムスリム以外の人々をイスラムに導く一方で、ムスリム諸国で他の宗教に改宗した人々が殺されてしまえば、コミュニケーションなど取れなくなる。（このような認識により、2006年初頭のアフガニスタンでキリスト教に改宗した人物の死刑が求刑された）クルアーンの文言に反し、宗教の仮面をつけた不正確なジハードの認識や信仰の強制は、コミュニケーションが取れなくなる要因となってしまう。文明間のコミュニケーションが成り立たない世界に暴力が満ち溢れるであろうことは、想像に難くない。

²⁹ Ismail Al-Faruqi, *The Nature of Islamic Da'wah, Christian Mission and Islamic Da'wah*, (The Islamic Foundation, 1982), p. 33-38

クルアーンと戦争倫理

クルアーンの戦争の捉え方が道徳的にふさわしいかどうかという議論は、盛んに行われている。相手との和解が見込まれる場合以外の（後ほど取り上げる）戦争の捉え方は4種類ある。クルアーンの捉え方はふさわしくないと主張する人物は、他の選択肢のどれが適切であるかを説明しなければならない。クルアーンによる戦争の捉え方こそ、（歴史上のあらゆるムスリムの捉え方ではなく）道徳的にふさわしいものであり、最も常識的であると、われわれは考える。

この4種類の捉え方を以下で説明する。

1- 理屈もなく、道理にかなった理由もなく戦うこと

この捉え方は、先にも述べたように、クルアーンに反している。歴史においては、タギー（かつてのインドの暗殺集団）がこれを実践している。タギーは、女神カーリーへのいけにえとして捕えた者や、自分の近くを通る多くの無実の人々を殺害した³⁰。

タギーは1200年間のうちに、およそ100万人の人々を殺害したと考えられている³¹。

2- 理屈のために戦うこと

一般的に、経済的な利益などの理屈が戦争の最大の理由であることに疑いの余地はない。理屈のために戦う人々は、正義や不正とは、などと憂慮することなく、本来の目的であるパワーを手にし、それを維持するために戦う。このアプローチは歴史上多く実践されてきたとはいえ、哲学的には認められていない。マキャベリはこのようなアプローチを掲げて有名になり³²、マキャベリ後も、数々の哲学的な考察により、似たような思想が伝えられた（例：社会ダーウィニズム）。攻撃をしかけてきた者と戦うことを許可するクルアーンの文言（巡礼章39節など）は、それを認めない。しかし、これまで挙げた例にあるように、政治的目的により宗教が利用された結果、神学上の知識やクルアーンの一部の文言が別の文言を否定する説や、ハディースを利用した解釈の方が、クルアーンの権威よりも重視されてしまった。

³⁰ Walter Reich, *Origins of Terrorism*, (Woodrow Wilson Center Press, 1990), p. 121

³¹ Bruce Hoffman, *Inside Terrorism*, (Columbia University Press, 1998), p. 89

³² Niccolio Machiavelli, *Discourses*, translator: Leslie J. Walker, (Penguin Books, 1955), p. 135

人々を戦争へと煽る状況ではいつも、利益にもとづく理屈が宗教的なレトリックによりカモフラージュされ、その戦争には道理にかなった理由があるとの主張がなされてきた。

3- どんな状況でも受け身でいること

クルアーンは、完全な受け身に反対していながらも、許すことの方が罰することよりも良いと伝える。以下の文言を見るとそれがわかる。

解説された章 34 節：善と悪は同じではない。より一層の善を行い、悪を遠ざけなさい。そうすれば、互いに敵意を抱く人でも、親しい友人のようになる。

協議章 43 節：耐え忍んで許せば、それこそが最善の道である。

クルアーンは、許すことの方が良いとするが、どんな状況でも受け身でいることを認めているわけではない。個人（例：マハトマ・ガンジー）または小規模のコミュニティが受け身を実践することと、一コミュニティを完全に亡き者にしようとする動きがあった際に受け身でいることは、それぞれ異なる視点で捉えなければならない。ムスリムは、攻撃を受けたとき、そして相手が自分を亡き者にしようとしたときに戦うよう促される。完全な受け身は攻撃する側をさらに凶暴にし、それは相手が子供、女性、老人を殺害するのをみすみす許してしまうことになる。なので、このような受け身は常識的ではなく、道徳的にも問題がある。

4- 道理にかなった理由で戦うこと

クルアーンの文言は、道理にかなった理由（攻撃を受けること）がある場合は戦ってもよいとしている（すべての非ムスリムとの戦いを正当化する者は、道理にかなった理由とは何であるかという問いを無視し、望む相手に自由に戦いをしかけてもよいと考えている）。攻撃を受けた場合に戦ってもよいとするクルアーンの姿勢は、道徳上、1-4 項の中でも最も常識的で相応なものである。自衛権は、国際法も認めているように、人間の最も自然な権利とされる。国連憲章 51 条によれば、攻撃を受けた者は自衛権を持つ³³。

戦時とはいえ、人を殺してもいいという文言がなぜクルアーンにあるのか関心をよせる人々もいる。戦争が、望まれないながらもときには避けて通れないという状況を、現実的な宗教が説明しているのはとても重要なことである。イスラムは殺人を禁じているので、戦争は殺害の許される例外的な状況であることをクルアーンが示していなければ、イスラムは完全な受け身を肯定するという結果に至っていただろう。クルアーンは、まず相手側が攻撃してきたという条件下では戦うことを許すと告げているほか、「戦争」にかかわる重要な事柄

³³ Hüseyin Pazarcı, *Uluslararası Hukuk*, Turhan Kitabevi, 2005), p. 512-513

を示している。そのうち最も重要なのは、預言者ムハンマド以外の人物が下す決定を、アッラーが啓示により認めてはいないことである。

なので、どんな人物も、自分は認識的に他人とは違う立場にいるとあって戦いをしかける決定を下しても、それには議論の余地があると言える。歴史上、様々な宗教の大勢の宗教的権威が、自分はその社会の他の者たちとは認識的に違う立場にいると主張してきた。例えば、教会は、聖霊（ガブリエル）の保護下におり、その立場は民衆とは違っていると表明することで、自らのあらゆる決定や見解の正当性を裏付けようとした。クルアーンがこのような姿勢を認めていないにもかかわらず、これと同じような主張がイスラム世界でも上がっている。一部の人物は、聖人であり、その立場からして、人々が決して得ることのできない特別な知識を持つと信じられてきた。こうした人物のどの決定にも、議論をさしはさむ余地はないと主張する人々がいる。ある者が聖人であるとされ、さらにはマフディー（救世主）とみなされれば、人々はその者をさらに信頼するようになる。このような特別な地位にいると信じられた人物が宣戦布告すれば、それは無論正当であるとみなされ、その戦争がクルアーンに適っているか、反しているか、または正当か、不正かという議論は無視されることになり、今後もしこうしたことが起きる可能性がある。

マフディーなる人物がこの世の終わりに現れ、異教徒と戦ってイスラムを守るという信仰は、スンナ派にもシーア派にもある。シーア派は、一般的に、この人物は1100年以上にわたり身を隠しているとの説を掲げる。シーア派にとってマフディーは非常に重要であり、アーヤトッラー・ホメイニ師が革命を起こす力を持っていたことから、マフディーの出現までホメイニ師がその代理を務めると信じられた。スンナ派では、何千とある教団のリーダーがマフディーを自称している。マフディーと信じられた人物は、その支持者から大きな政治的権力を得る。ウェーバーのような視点から見ると、マフディーは、カリスマ的な権威というものの最も決定的な姿をしている。テロリズムの根源に関する議論においていつも思い出されるハサン・サッバーフも、こうした信仰を利用した³⁴。ところが、クルアーンには、マフディーに関する文言は一つもないのだ。ハディースに関する現代の研究の大半が、マフディーに関する説はハディースに記されており、それが政治的な目的のためであることを立証している³⁵。

オサマ・ビンラディンもマフディーたり得るといふ風聞が広まったことを考えれば、この問題がどれほど重要かがさらにわかる³⁶。

³⁴ Ali Coşkun, *Mehdilik Fenomeni*, (İz Press, 2004), p.343-345

³⁵ M. Hayri Kırbaoğlu, *Alternatif Hadis Metodolojisi*, (Kitabiyat, 2004), p.369-370

³⁶ Timothy R. Furnish, *Bin Laden: The Man Who Would Be Mahdi*, (The Middle East Quarterly, Spring 2002)

結論を言えば、クルアーンは、預言者ムハンマドの死後、どんな人物であれ、認識上特別な地位にあることを一切認めていない。なので、人々よりも優れた特別な地位を標榜して不当な戦争を行うことは、正当化されないのである。

戦争倫理からすると、戦争を始めるための条件のほかに、戦争の進め方も重要である。道理にかなった理由により始まったはずの戦争中に不当な行動を起こす者もいるように、道理にかなっていない理由により始まった戦争も、公正な形で進めることはできる。クルアーンの次の文言を、戦争の進め方に注意するために考慮する必要がある。

雌牛章 190 節：あなた方を攻撃する者に対し、アッラーの道において戦いなさい。しかし、限度を超えてはならない。本当に、アッラーは、限度を超える者を愛しはしない。

見てのとおり、クルアーンは攻撃をしかけてきた者と戦うことは認めているが、戦いが始まった後のどんな進め方をも許しているわけではない。むしろ、戦っているときに限度を超えてはならないと告げている。どの戦争においても新たな現象が起きるもので、古い武器と新しい武器の違いも、戦争をどう進めるべきかという議論を盛んにする。クルアーンが戦争の進め方に関する明白な原則のほかに詳細を語っていないことで、その時代の条件に適ったやり方を柔軟に実践することができる。

「イスラムと戦争」というテーマを比較倫理学の視点から取り上げたジョン・ケルセイも言うように、「イスラムは、現代の戦争をどう進めるべきかという条件に、今も一層貢献し続けている³⁷」のである。

後ほど取り上げるが、どんな「相手」とも和議に至ることができるというクルアーンの文言は、戦争の進め方に関するテーマと合わせて取り上げることができる。

クルアーンは、戦争の始まりと進め方に関する原則を伝えている一方で、相手が和平を望めば戦争を続けてはならないと告げている。それに関する2つの文言は次のとおり。

戦利品章：もし彼らが和平に傾いたなら、あなたもそれに傾き、そしてアッラーを信頼しなさい。

試問される女性章：アッラーは、宗教上のことであなた方と戦わず、またあなた方を家から追放しなかった人々に、善を行い公正にすることを禁じない。アッラーは公正な人々を愛するからである。

イスラムは、「どの国家にも、道理にかなった理由なくして、理屈のために戦う権利を与えない³⁸」というジョン・ロールズ（戦争倫理を研究する大半の人々も同じ意見を持つ）の

³⁷ John Kelsay, *Islam and War*, (John Knox Press, 1999), p.76

言葉どおりの指示を下していると言える。ただし、イスラムとムスリムについてははっきりと区別する必要がある。ムスリムはイスラムの教えを追求する人々であるとはいえ、ムスリムも（たいてい多くの目的が宗教的義務よりも重視される）理屈上、利益を求めるものである。戦争が理屈により始まる場合はたいてい、神学者や宗教指導者が、その戦争が宗教的な理由から必要なものであると伝えるファトワー（宗教的見解・判断）を告げる。戦う人々が戦争を正当なものともみなすために、こうしたファトワーを授かることは重要であり、また、人々を動かすためにイスラムの存在論や終末論が利用されることもあった。イスラムの存在論と終末論によると、すべてを創造し、すべてにおいて十分な力を持つ神がおり、神はこの世の後にあの世の永遠の生活を準備しており、すべての人々のあの世の生活はこの世で行ってきたことにより決まる。

イスラムは、アッラーのもとに行う戦いで殉教した人々は、あの世で天国に行けると告げている。結論を言えば、イスラムの存在論と終末論には、この世の利益を超越した目標があるのだ。イスラムによると、殉教者は短いこの世の生活から離れて完璧な永遠の生活を営むことになる。自分のパワーのために戦争を起こそうとする者は、この存在論と終末論を利用して人々を動かそうとしてきた。結果として、ジハードは説得の手段として利用されたのである。ジハードがレトリックとして利用されているとわれわれが言う理由はここにある。

³⁸ John Rawls, *The Law of Peoples*, (Harvard University Press, 2002), p. 91

クルアーンから見た和議締結とコミュニケーション

ホッブズの思想に続いたカントは、「隣り合って暮らす人々の間の平和状態は決して自然状態 (status naturalis) ではなく、それはむしろ、常に布告されるわけではないとはいえ、いつ何時勃発するかわからない戦争状態である。そうなると、持続可能な平和状態を築くことが必要となってくる³⁹⁾」と言っている。戦争が痛ましいものでありながらも避けて通れないこの世界で、有益なコミュニケーションなくして戦争を克服し、平和を築くことはできない。なので、「異なる人々」、特に、敵とのコミュニケーションについてのイスラムの視点を理解することは極めて重要である。預言者ムハンマドは、偶像崇拝者の集団とフダイビヤの和議を結び、周りのムスリムの一部が快く思わなかったにもかかわらず、その和議を履行した⁴⁰⁾。

しかし、偶像崇拝者が和議を破ったとき、ムスリムもその履行を止めた。それでもムスリムはすべての偶像崇拝者に対して和議を破ったのではなく、その中で和議に従った者に対しては、自らもそれを忠実に守ったのである⁴¹⁾。このことはクルアーンの次の文言ではっきりとわかる。

悔悟章 4 節：ただし、あなた方が和議を結んだ多神教徒たちで和議を一切破らず、あなた方に敵対する者を助けなかった者は別である。なので、期間が終了するまで彼らとの和議を履行しなさい。誠にアッラーは、(アッラーを) 意識する人々を愛するのである。

ムスリムに約束／誓いを守るよう告げるクルアーンの文言も、ムスリムに結んだ和議を守るよう伝えているために重要である。次の文言がその例である。

夜の旅章 34 節：約束に忠実でいなさい。約束とは責任だからである。

ムスリムにとって和議を守ることは極めて重要であり、他のムスリムを助けるときすら、それより前に結んだ和議を考慮しなければならない。これに関するクルアーンの文言は次のとおり。

³⁹⁾ Immanuel Kant, Sürekli Barış Üstüne Felsefi Bir Deneme, translator: Nejat Bozkurt, Seçilmiş Yazılar içinde, (Remzi Press 1984) p. 233

⁴⁰⁾ Muhammed Hamidullah, "Hudeybiye Antlaşması" maddesi, Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 18, (Türkiye Diyanet Vakfı Press, 1993) p. 297-299

⁴¹⁾ Elmalılı M. Hamdi Yazır, Hak Dini Kuran Dili, Cilt 4, (Zehreveyn), p. 278-279

女性章 90 節：あなた方と和議を結んだ一派に仲間入りした者、またはあなた方とも自分の味方とも戦うことを避け、あなた方のところに来るものは別である。もしアッラーが望んだなら、アッラーはあなた方よりも彼らに力を与え、彼らはあなた方と戦っていただろう。もし彼らが身を引いて、あなた方と戦わずに和平を申し出るなら、アッラーは、あなた方に彼らと戦う道を与えない。

戦利品章 72 節：信仰し、移住し、アッラーの道のために、財産も命も捧げて奮闘した人々と、彼らに避難所を与えて助けた人々は、お互いの擁護者である。信仰しても移住しなかった人々については、彼らに移住するまであなた方に保護する義務はない。しかし、彼らが宗教に関してあなた方に助けを求めるのなら、彼らを助けることはあなた方の義務である。ただし、あなた方と和議を結んだ人々に逆らわない限りは。アッラーは、あなた方のすることをすべてお見通しである。

クルアーンが和議に重点を置いていること（本書を執筆した理由の一つもこれを十分に伝えることである）が、現代の問題にとってこの上なく重要であるということは、十分に理解されていない。クルアーンの文言は、預言者ムハンマドが、敵対する人々とすら和議を結び、ムスリムがそれを守ったことを伝えている。ここから理解すべき原理は、ムスリムにとって、和議に至ることができない敵など一切いないということである。敵の素性が和議を不可能にする理由になることは、ない。

イスラムによると、預言者ムハンマドは、アッラーの特別な保護を受けており、その敵に対する正当性は、啓示（クルアーン）を通じてアッラーから認められている。クルアーンは、預言者以外の者が、認識上、特別な立場にいるという考え方を裏付けていない。ここからわかる結果は、どんな人物であれ、そのカリスマ性が和平を戦争より重視するクルアーンの表明よりも優先されてはならず、和平を築き守るための手段となる和議を破ってはならないということである。そうした人物が、歴史上のカリスマ的な人物であっても、現代に生きるカリスマ的な個人であっても、それは同じなのだ。

また、不和とはどれも、新たに起きる事象である。現に存在する不和とクルアーンが伝える出来事が似ているかどうかは、必ず考慮し検討しなければならない。しかし、こうした出来事のどれ一つとして、クルアーンが伝える歴史的な事象と完全に一致しているわけではないことも、念頭に置く必要がある。やむを得ない場合の宣戦布告は、クルアーンの主要原則に沿っていればこそ可能である。しかし、預言者ムハンマドの時代の宣戦布告と鑑みて、これ以外に戦争が必要であるとする個人的な見解は、決して正しいものではない。後者には神の啓示がないからである。クルアーンの完成とともにムスリムに下った啓示も終わったので、もはやどの宣戦布告（ジハード）も、預言者の時代と同じように当然になされることとはならないのだ。ここからわかる結論は、ムスリムは、戦争が必要であるという主張に対し批判

的な視点を持つべきということである。その視点は、宗教的概念が政治的・個人的利益のためにレトリックとして利用されるのを防ぐために極めて重要なものとなる。

ムスリムは、存在論と啓示に対する認識を持つことで、普遍的な事実が存在することを信じる。この点で、ムスリムのアプローチは、ハーバーマスの超越論的事実を認めないそれとは違う。しかし、ムスリムもわかっているように、ムスリムが認める普遍的事実は、誰もが認める事実とは限らない。では、ムスリムは「異なる者」とコミュニケーションを取ることができるのだろうか？先に挙げたクルアーンの文言は、それが可能であり、さらには必要とあらば敵ともコミュニケーションを取ることができると伝えている。和議を結ぶということは、「異なる者」と言語を通じて接触すること、「異なる者」が異なるものであり続けることを受け入れること（これはシャーフイー学派の認識とは完全に反対である）、「異なる者」が異なる存在論や認識を持っていても、彼らと和解し、和解した事柄に忠実であることを意味する。哲学において「コミュニケーション的行為」の概念を最も有名にしたのはハーバーマスである。ハーバーマスによると、「コミュニケーション的行為」のためには言語を解決の手段として使い、和解に至ることが当事者間の目標でなければならない⁴²。和解に至ることは、コミュニケーションの結果として果たすべき目的である。なので、「異なる者」との和解は可能であるとクルアーンが強調していることは特に重要である。和解の前に行われていたことが正当か、必要かが、このようにしてはっきりするからである。

⁴² Jurgen Habermas, *The Theory of Communicative Action*, translator: Thomas McCarthy, 1, (Beacon Press, 1985)

「要因」となることと「人を動かすための要素」となることの 違い

宗教は、暴力を減らしもすれば作り出す面も持つと、ラポポートが言っているのはもっともである⁴³。それでも、多くの人と違い、歴史上起きた戦争の大半の要因は宗教であるという説が正しいとは、われわれは考えない。まず着目すべき点は、歴史の記述の大半が戦争史であること、勃発する可能性がありながら行われることのなかった戦争が多く存在したことは確実なのに、そうした戦争が歴史書で伝えられていないことである。もし実際にあった戦争の要因が宗教にあるのなら、阻止された戦争のためにも宗教が評価されているのではないだろうか？

宗教的な出来事は、戦争の要因となる一方で、和平ももたらしたはずではないだろうか？戦争の要因は宗教にあると言う者は、戦争が行われなかったか、阻止された理由が宗教にあると言うことを避ける。そもそも歴史書が阻止された戦争に関する知識をほとんど伝えていないので、そうしにくいのだ。実際にあった戦争の歴史しか知られていないため、異なる視点を持つことは論理的に難しい。また、既知の歴史の中でも宗教の人々への影響が最も少なかった 20 世紀が、戦死者の数が最も多い時期だったということも、覚えておく必要がある。人類の歴史の大部分において、人々の生活を方向づけた最大の要素は宗教である。なので、戦争の本当の要因が何であれ、戦いに赴く人々を動かすために宗教的なレトリックを使うことが必要とされた。たいていの場合、このレトリックがなければ戦争を起こすことはできなかった。歴史家たちが数えきれないほどの出来事により示してきたように、宗教的なレトリックで行われた多くの戦争の背景にある根本的な要因は、経済的・政治的パワーを強化したいという欲望である。ハンス・モーゲンソーの「政治的リアリズム」(political realism) が示すように、合理的・客観的・精神的なものとは程遠いパワーの策謀が、戦争の本当の要因となったのだ⁴⁴。

宗教的な倫理が道徳的な憂慮のない「政治的リアリズム」のアプローチを否定しているとはいえ、たいていは、「宗教指導者」の見解の方が優先されてきた。そしてそれを可能にしたのは、こうした「宗教指導者」が政治的権威と近しい関係を持っていたことである。カントは「倫理的政治家」(moral politician) と「政治的倫理家」(political moralist) を区別す

⁴³ David Rapoport, 'Some General Observations on Religion and Violence', *Journal of Terrorism and Political Violence*, No:3, 1991. p. 118

⁴⁴ Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace*, (Alfred A. Knopf, 1978)

る。前者は政治的原理を倫理に沿って解釈する人物である。後者は、倫理のルールを自分の有利になるように変える⁴⁵。「政治的倫理家」の主な目標は、「政治的リアリズム」によるパワーを守り、拡大することである。レトリックとしての宗教的概念は、「政治的倫理家」の手で「政治的リアリズム」の道具として利用されてきた。なので、戦争が宗教のもとに行われたと思われている多くの事例において、宗教的レトリックはただ人々を動かすために利用されてきたと言える。道徳的価値が勝った事例もありながら、これまで述べてきたように、歴史が本来は戦争史であることで、そのような事例は目につきにくくなった。必要とあらばパワーを手に入れるために戦うべきであるとし、この世でパワーを手にするという目標を、道徳的価値などの精神的なアプローチを考慮せずに達成すべきとする「政治的リアリズム」よりも、この世の利益より重要な利益が存在するという宗教的アプローチこそが、世界に平和を築くという目標にとって有益であると、われわれは考える。

なので、平和を築き、守るための活動に必要なコミュニケーションを行うためには、暴力の根源である「政治的リアリズム」が持つ、世界平和を危うくするのも厭わない経済的利益などの理屈上の策謀によるアプローチに対し、すべての世界宗教を役立てることが必要となってくるのだ。

イスラムは暴力の要因なのか、人々を動かすための要素なのかという問題をしっかり区別しなければならないと、われわれは考える。多くの人々がこの区別をしないまま、イスラムが人々を動かすために利用された多くの出来事において、イスラムこそが暴力の要因であると言っているのが見受けられる。イスラムが暴力の要因であるということは、暴力が、イスラムがそれを命じたために起きたという意味である。実際に、「礼拝をしなさい」「断食をしなさい」と命じたり、「豚肉を食べてはならない」と禁じているイスラムは、いろいろな実践や禁止においてムスリムの行動の源であり、こうした命令や禁止の「十分な理由」もイスラムである。ムスリムがこうした行為をし、禁止事項を避けるようにする唯一の拠り所がイスラムなのだ。しかし、ムスリムが行う防衛戦を考慮しなければ、そのほとんどすべての戦争の理由は経済的・政治的なものであると言える。さらには、ムスリムが防衛戦として行う多くの戦争においてすら、イスラムが「礼拝をしなさい」「断食をしなさい」という命令を下すのと同じように戦争を起こす要因になるとは言えない。攻撃に遭ったコミュニティはたいいてい、ムスリムでなくとも、攻撃を受けたときに防衛戦に出るものである。また、特定の政治的・経済的問題がなければ、イスラムのもとに行われたと言われる戦争のほとんども、起こることはなかった。つまり、イスラムは、こうした戦争の「十分な理由」ではない。イスラム的なレトリックを使って行われる戦争や暴力のほとんどの要因は、本来はイスラムではなく、イスラムは、人々を動かすための要素として利用されているのだ。

⁴⁵ Immanuel Kant, *ibid.*, p. 128

文明間のコミュニケーションを築くためには、神学的・倫理的・哲学的問題を考察するほか、課題の芯となる具体的な問題を解決するよう努めなければならない。ハンティントンによれば、文明間の主要な問題は、経済ではなく、文化と宗教である⁴⁶。このようなアプローチでは、欧米とムスリム諸国間の問題の経済的な側面を十分に理解することはできない。ハーバーマスは、グローバル化がもたらすコミュニケーションの問題の原因は、文化ではなく経済であると考え、ハンティントンのアプローチを否定する⁴⁷。

ムスリム諸国は、世界で最も豊かな天然ガス鉱床と油田を持っていながら、世界の最貧国である。世界の人口の22%がムスリムなのに、ムスリムの所得は世界のわずか3.8%しかない⁴⁸。ムスリムが経済的に搾取され、パレスチナが不当な目に遭っているという考えにより、多くのムスリムが欧米に対する憎悪を抱いている（本書では、ムスリムが経済的に搾取されているかどうか、またパレスチナが不当な目に遭っているかどうかという議論は扱っていない。しかし、この問題の捉え方が何であれ、ムスリムの大部分が持つ一般的な考え方を理解せずに問題を解決するためのコミュニケーションを図ることは無論できない）。憎悪は文明間のコミュニケーションを不可能にし、暴力を行使する国家やグループは憎悪の感情を利用する。

ムスリム諸国に対し、あるいはイスラムの名のもとに暴力が行使される場合、その最も基本的な問題は（ハーバーマスも着目するように）、経済問題であると言うことができる。

信仰と文化遺産の視点から見ると、イスラムの文明は、どちらもアブラハムの伝統に由来しており、世界の多くの文明よりもお互いに近い。もしイスラム勢力が欧米に対し（ハンティントンが示唆したように）宗教と文化が違うというだけで暴力を行使するとすれば、宗教的な意味で彼らとは異なる日本や中国をまず攻撃すべきではないだろうか？あるいは、キリスト教徒または欧米人というだけで欧米諸国に対し暴力を行使するとすれば、アメリカやイギリスに対する態度をスイスやブラジルに対しても取るはずではないだろうか？ハンティントンによれば、欧米にとっての主な問題は、イスラム原理主義ではなく、イスラムそのものである。ハンティントンのようなアプローチをする人々は、ムスリム諸国の文化を無理やり変えようとするか、あらゆるやり方で自分の文化に同化させようとするかもしれない。しかし、それは、新たな暴力を煽るだけである。アブドゥル・アジズ・サイードとミーナ・シャリフィ・ファンクの論文にあるように、

⁴⁶ Samuel Huntington, *The Clash of Civilizations and The Remaking of World Order*, (Simon and Schuster, 1997)

⁴⁷ Giovanna Borradori, *Philosophy in a Time of Terror*, (The University of Chicago Press, 2003), p. 65

⁴⁸ Ahmet Sözen, 'Küreselleşmenin Getirdikleri ve ABD'nin İkilemi', (Karizma, January-March 2002), p. 55

「ハンティントンの説は、秩序だった、安全な、かつ安定した世界を実現するためには、全世界が欧米の基準と理念に従うべきという条件を唱える文化的優位論者の考え方に満ち満ちている。もし他の者が同調できなければ、問題や衝突は避けられないものとなる⁴⁹」。

一方、ハーバーマスのように考える人々は、経済的な問題を解決しようと努める。問題の原因を突き止める方法が誤っていれば、その解決方法も誤ったものになる。多くの人々が、イスラムこそが本当の問題であると述べており、「文明の衝突」論は、文明の衝突を起こすための手段として利用されているのである。

⁴⁹ Abdul Aziz Said, Meena Sharify-Funk, *Dynamics of Cultural Diversity and Tolerance in Islam*, *Cultural Diversity in Islam içinde*, ed. Abdul Aziz Said, Meena Sharify-Funk, (University Press of America, 2003), p. 19

例外的な緊急事態

暴力を止めようとしなない者は、人々に戦争の正当性を認めさせ、敵に対して人々を動かそうとするために、あるときは「テロ」、またあるときは「ジハード」をレトリックとして利用してきた。メディア、経済力、そして最新技術を駆使して造った武器の恩恵を受けることができる者もいれば、電子装備で身を固めた軍隊に対しゲリラ戦を展開する者もいる。「テロ」をレトリックとして使う者が、自分のどんな行動をも疑問を持たれることなく認めさせようとするように、「ジハード」をレトリックとして使う者も、自分と敵対する者はイスラムと敵対する者であると主張して、議論をかき消そうとする。そのどちらも、自分に対する反対意見を自分のレトリック（「テロ」と「ジハード」）により黙らせようとする。一方は一般人に紛れた相手を捕えることができずに砕け散ったプライドを守るために諸国に戦争をしかけて一般人を殺害し、他方は圧倒的な技術的優位を持つ相手に復讐するために一般人を攻撃する。その結果、両者ともに、何が起きたのか知らない多くの子供や女性の死を招くのである。カントの「どの国家も、戦争するときは、将来的に和平をもたらすことが可能になった際に国家がお互いを信頼できなくなるような手段に訴えてはならない⁵⁰」という原則は常に破られている。本来危険なのは、今起こっていることが、将来的にさらに大きく阻止不能な事件を生むことである。この極めて危うい袋小路から逃れるために、文明間の有益なコミュニケーションを図ること以外の解決は見当たらない。

「ジハード」または「テロとの戦い」のレトリックにより一般人を死なせる者は、その行為を認めさせるために様々な理由を挙げる。そうした理由は、マイケル・ウォルツァーの言い方によれば、「壁に追いつめられた」（back-to-the-wall）説である。つまり、戦争の慣習にふさわしい抵抗手段が見込みがなく利用できないものであれば、勝つための方法はどんなものであれ許されることになるのだ⁵¹。ウォルツァーが歴史から挙げた例は、1940年代のイギリスである。ナチスの脅威に敗北する可能性があったため、無実の人々の権利を無視して戦争の協定を破ることを余儀なくさせる「緊急事態」が生じた⁵²。

⁵⁰ Immanuel Kant, *ibid.*, p. 230

⁵¹ Michael Walzer, *Just and Unjust Wars*, (Basic Books, 1992), p. 252

⁵² Michael Walzer, *ibid.*, p. 259

ウォルツァーは、「彼らは我々をやむを得ない事態に直面させている。そして、やむを得ない事態はルールを無視する⁵³」と言っている。ロールズも、「例外的な緊急事態」があることを認める。

ロールズは、「この例外は（いくつかの特別な状況で）、一般人が普通の条件のもとで戦争の際に直接攻撃を受けるのを阻止する確固たる立場を一時的に留保させる」と言う⁵⁴。

アンドリュー・フィアラも指摘するように、「テロとの戦い」を認めさせるのに利用される哲学的口実に「緊急事態」がある⁵⁵。しかし、「壁に追い詰められた」状況下では、「テロ」の擁護者も、「テロとの戦い」を擁護する者と同じように、「緊急事態」を適用するための理論を自分の行動を正当化するために利用することがある。一方で、例外を認めないカント的倫理⁵⁶の擁護者にとっては、どんな理由であれ、一般人を死なせる両者の論のどちらも不当である。このことは、哲学的な観点から皮肉な結果を生む。ロールズの「緊急事態」を擁護するアプローチは、両者のどちらの正当性をも裏付ける際に利用できる論だが、カントのアプローチは、両者のどちらともが相手に罪を着せるために利用できる論となり得るのだ。

本来、戦う当事者が両方とも自分の正当性を掲げることと、両方ともが不当であると判断することの間には、実質的な違いは見られない。暴力行為の道徳性について議論することは、哲学の観点からもちろん必要である。しかし、その議論の結果として意見が一致し、実際に暴力が止まるかということ、そうもいかない。なので、より結果が得られやすい分野に哲学的議論の的を絞る方が、有益である。

まず、文明間のコミュニケーションをどう図るか、そして世界の平和を築き守る具体的な動きは何であるべきか、そしてそれをどう立ち上げるかに焦点を当てなければならない。

ハンナ・アーレントも指摘するように、個人を弊害から守る最良の解決策の一つは、その人が政治的プロセスに積極的に加わることである⁵⁷。なので、ムスリムが少数派である地域で、そして大半がムスリムである国で少数派として暮らす人々も、その国の公的・政治的な場に加わるのが重要である。

⁵³ Michael Walzer, *ibid.*, p. 254

⁵⁴ John Rawls, *ibid.*, p. 98

⁵⁵ Andrew Fiala, *Terrorism and The Philosophy of History: Liberalism, Realism and Supreme Emergency Exemption*, (*Essays in Philosophy*, April 2002)

⁵⁶ Immanuel Kant, *Critique of Practical Reason*, translator: James Creed Meredith, (Clarendon Press, 1978)

⁵⁷ Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, (Harvest Books, 1973)

さらに大事な点は、人口の大半がムスリムである国々が国際的なプロセスに積極的に加わることである。こうして、この国々は、そのような動きが保証されることで恩恵を受けることができ、その動きもムスリム人口にとって正当性を持ち、問題解決能力を高めることができる。特に、国連安全保障理事会が常任理事国の拒否権に関して行う改革は、安保理が、強い者ではなく正当な者の側にいることを示すために重要となってくる。こうした動きの正当性を高めるための具体的な取り組みが行われた後は、積極的に行動する平等な当事者としてムスリム諸国も含む協定を提案し、その中で、戦争をどう防ぎ、また実施すべきかで諸国が意見を一致させる必要がある。

コミュニケーションは、国連以外の機構や環境でも、いろいろな方法で図ることができる。当事者の両方ともがコミュニケーションを取りたがらないこともあるだろうが、どちらの側でも、意志のある者が、それ以外の者を気にかけることなくコミュニケーションを実現するために努力しなければならない。特定の経済的な利益が原因で起きる戦争を批判し、また暴力の言葉ではなく対話の言葉を奨励することで、コミュニケーションは発展する。暴力の宣伝に利用されるレトリックを振り落とすことができれば、対話と平和を模索する際にわれわれの前に立ちはだかる大きな障害から救われることになる。これに関して実現すべき最も有益な哲学的成功は、「政治的倫理家」(political moralists)が国のトップにいる時期でさえ、世界の平和を最良の形で守るための具体的な行動が何であることを示し、それを実現するコミュニケーションを提唱することができることにある。

参考文献

- Al-Faruqi, Ismail. The Nature of Islamic Da'wah, Christian Mission and Islamic Da'wah içinde, The Islamic Foundation, 1982.
- Arendt, Hannah. The Origins of Totalitarianism, Harvest Books, 1973.
- Arıboğan, Deniz Ülke. Tarihin Sonundan Barışın Sonuna, Timaş Yayınları, 2003.
- Borradori, Giovanna. Philosophy in a Time of Terror, The University of Chicago Press, 2003.
- Civelek, Mehmet Ali. Küreselleşme ve Terör, Saldırganlık Gerçeği, (Ütopya Yayınevi, 2001).
- Coady, C.A.J. The Morality of Terrorism, Philosophy 60, 1985.
- Coşkun, Ali. Mehdilik Fenomeni, İz Yayıncılık, 2004.
- Derrida, Jacques. Autoimmunity: Real and Symbolic Suicides, A Dialogue with Jacques Derrida, interview with Giovanna Borradori, Philosophy in a Time of Terror, trans: PascaleAnne Brault and Michael Naas, supervisor: Jacques Derrida, The University of Chicago Press, 2003.
- Elik, Hasan. Dini Özünden Okumak, Marmara Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Vakfı Yayınları, 2004.
- Esed, Muhammed. Kuran Mesajı, trans: Cahit Koytak ve Ahmet Ertürk, İşaret Yayınları, 1996.
- Esposito, John L. Unholy War, Oxford University Press, 2002.
- Fiala, Andrew. Terrorism and the Philosophy of History: Liberalism, Realism and the Supreme Emergency Exemption, Essays in Philosophy, April 2002.
- Foucault, Michel. Power, Right, Truth, ed: Robert E. Goodin and Philip Pettit, Contemporary Political Philosophy, Blackwell Publishers, 2002.
- Habermas, Jurgen. Fundamentalism and Terror: A Dialogue with Jurgen Habermas, Giovanna Borradori ile röportaj, in Philosophy in a Time of Terror içinde, trans: Luis Guzman, supervisor: Jurgen Habermas, The University of Chicago Press, 2003.
- Habermas, Jurgen. The Theory of Communicative Action, trans:

- Thomas McCarthy, Cilt 1, Beacon Press, 1985
- Hamidullah, Muhammed. "Hudeybiye Antlaşması", Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 18, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1993.
- Hoffman, Bruce. Inside Terrorism, Columbia University Press, New York, 1998.
- Huntington, Samuel P. The Clash of Civilizations and The Remaking of World Order, Simon and Schuster, 1997.
- Kant, Immanuel. Critique of Practical Reason, trans: James Creed Meredith, Clarendon Press, 1978.
- Kant, Immanuel. To Perpetual Peace A Philosophical Sketch, trans: Ted Humphrey, Perpetual Peace and Other Essays, Hackett Publishing Company, 1983.
- Karlığa, Bekir. 'Cihad ve Terör', Karizma, Mart 2002.
- Kelsay, John. Islam and War, John Knox Press, 1999.
- Kırbaçoğlu, M. Hayri. İslam Düşüncesinde Hadis Metodolojisi, Ankara Okulu Yayınları, 1999.
- Kırbaçoğlu, M. Hayri. Alternatif Hadis Metodolojisi, Kitabiyat, 2004.
- Kuran-ı Kerim, trans: Ali Bulaç, Bakış Yayınları.
- Machiavelli, Niccolio. Discourses, trans: Leslie J. Walker, Penguin Books, 1955.
- Morgenthau, Hans J. Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace, Alfred A. Knopf, 1978.
- Özaydin, Abdulkerim. 'Hassan Sabbah', Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 16, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1997.
- Özel, Ahmet. 'Cihad', Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi, Cilt 7, Türkiye Diyanet Vakfı Yayınları, 1993.
- Pazarcı, Hüseyin. Uluslararası Hukuk, Turhan Kitabevi, 2005.
- Rapoport, David C. 'Some General Observations on Religion and Violence, Journal of Terrorism and Political Violence', No:3, 1991.
- Rawls, John. The Law of Peoples, Harvard University Press, 2002.

- Reich, Walter. *Origins of Terrorism*, Woodrow Wilson Center Press, 1990.
- Schmidt, Alex. Albert Jongman, et al, *Political Terrorism*, Transaction Books, 1988.
- Swetham, Michael S. Alexander, Yonah. *Bir Terörist Ağının Profili: Usame Bin Ladin*, Güncel Yayıncılık, 2001.
- Terrorism Definitions (28 Code of Federal Regulations, Section 0.85)
<http://www.pa-aware.org/what-is-terrorism/pdfs/B-2.pdf>, 20 Nisan 2006.
- Yazır, Elmalılı M. Hamdi. *Hak Dini Kuran Dili*, Cilt 4, Zehraveyn.
- Sözen, Ahmet, 'Küreselleşmenin Getirdikleri ve ABD'nin İkilemi', *Karizma*, Ocak, Subat, Mart 2002.
- Said, Abdul Aziz - Meena Sharify-Funk, *Dynamics of Cultural Diversity and Tolerance in Islam*, ed: Abdul Aziz Said - Meena
Sharify Funk, *Cultural Diversity and Islam içinde*, University Press of America, 2003.
- Tavlas, Nezh. 'Terörü Tanımlamak', *Strateji Dergisi*, 2, 1995.
- Walzer, Michael. *Just and Unjust Wars*, Basic Books, 1992.
- Wittgenstein, Ludwig, *Philosophical Investigations*, Blackwell Publishing, 2001.